

8. 大正デモクラシー

8.1 大正デモクラシーの時代の流れ

日露戦争後の 1905(M38)年から満州事変前夜 1931(S6)年 9 月までのほぼ四半世紀を指す。

日露戦争が一方に置いて国民を帝国主義的海外発展に陶醉せしめたと共に、他方、国民の自覚と民智の向上とを促して自らデモクラチックな思想の展開に資したことは既に人の良く言うところである。

吉野作造「民本主義鼓吹時代の回顧」『社会科学』1928(S3)年所収

1905(M38)年、日露戦争終結後のポーツマス講和条約に賠償金が盛り込まれなかったことへの不満は日比谷焼打ち事件につながっていった。大正デモクラシーは、雑業層(人足、車夫、職人)と旦那衆(親方、中小商店主、中小工場主)の二つの階層が参加した民衆が構成する「帝国」のデモクラシーだった。

大正デモクラシー理解のためのトピックスとキーワードズ

○労働運動、社会主義者の活動 (荒畑寒村、片山潜、幸徳秋水)

大正デモクラシーとは、出発点においては「大日本帝国」に成り上がった明治日本が従来の構造では対応できなくなったことに由来して起こる運動の総体となっている。様々な階層により、旧来の社会構造と秩序に対抗して展開された運動である。

○日露戦争後の領土拡大

1895(M28)年台湾、1905(M38)年南樺太植民地化、1910(M43)年韓国併合

○明治の終焉

1912(M45)年 7 月 29 日明治天皇崩御。9 月 13 日大葬の礼当日の元陸軍大将乃木希典夫妻殉死に賛否両論。夏目漱石「心」。明治の精神が天皇に始まり天皇に終わる。

○第一次世界大戦開戦

1914(T3)年、ドイツ仮装巡洋艦攻撃への英国の要請で参戦。

○元京都帝大教授・経済学者河上肇「貧乏物語」

1916(T5)年「相対的な貧乏」「被救出者としての貧乏」「肉体の健康的維持が困難に貧乏」の三分類中、第三の貧乏を扱った。貧乏問題は分配ではなく、生産にあるとし、重要な事業を「官業」とする国家経営をすべ

きであると説いた。

○第一次世界大戦期の社会変立身出世の新たなシステムとして受験が社会に組み込まれた。

○主婦の自覚

中流家計を対象とした雑誌「主婦之友」創刊。当時の規範は、女性は家庭に従事すべきというものだった。

○1918(T7)年夏の米騒動

米価格高騰に加え夏場の端境期で供給不足、シベリア出兵の為の買占め、売り惜しみが横行し、日本海沿岸で船で積み出される米の阻止を図り女性が集団で役場や詰め所に押しかけた。

○平民宰相 原敬・政党内閣の実現

1918(T7)年 9 月 27 日内閣成立 1921(T10)年 11 月 4 日暗殺

○1919(T8)年、雑誌『改造』創刊

「改造」はこの時期を代表する言葉だった。賀川豊彦、『死線を越えて』で大病を克服した主人公がスラムで布教活動を行う経験を描く。植字工が涙を流しながら活字を組んだ。

○地域の文化活動

1921(T10)年、市民の手によ

って作られた自主教育機関「信濃自由大学」が誕生し、広まった。全国の農村青年が組織した初の文化、教育活動であった。

○北原白秋が文部省唱歌を批判 子どもを型にはめて個性を圧すると自由学園(羽仁もと子)、明星学園(赤井米吉)、文化学院(西村伊作)らが大正自由教育を展開した。

○韓国独立運動

1919(T8)年 3 月 1 日、三一運動への憲兵隊による弾圧。吉野は運動に共感を寄せた。

○全国水平社結成

1922(T11)年 3 月 3 日、被差別部落解放を目指す全国水平社結成。日本最初の人権宣言「水平社宣言」が読み上げられた。

○植民地統治論

第一次世界大戦後は「武断統治」から「文化統治」へ転換した。大学でも植民政策学が講じられた(東京帝国大学、新渡戸稲造。後任が矢内原忠雄)。

○関東大震災

1923(T12)年 9 月 1 日午前 11 時 58 分 M7.9 中央気象台地震計の針が振り切れ飛び散った。一府六県 3,404,898 人が被災した。死者 91,344 人、その内、火災によるものが 75,953

大正デモクラシー

人。重軽傷者が 52,084 人、行方不明者が 13,275 人。東京の市街地の 44%が消失した。「朝鮮人が危険」のデマが流され、6,000 人を越える朝鮮人が虐殺される。虐殺が起きたのは荒川周辺など朝鮮人と職を競合する地域に多かった。

○『女工哀史』

細井和喜蔵、1924(T13)年紡績工場のルポを雑誌『改造』に発表、翌年単行本として改造社から刊行し、注目を浴びた。

○世界恐慌

1929(S4)年 10 月 24 日、「暗黒の木曜日」。米国で株の大暴落が起こり、アメリカ全土に失業と貧困が広がった。

小林多喜二、酷使される労働者を群像として描いた『蟹工船』発表後、発禁処分を受け、1930(S5)年に不敬罪で追訴。

1930(S5)年は豊作で米価は下落、翌年には凶作飢饉、東北地方の農村を中心に恐慌は本格化し、娘の身売り話が出た。

沖縄では「ソテツ地獄」と呼

ばれる惨状が展開していた。ソテツは飢饉時の非常食とされるが、有毒成分を含み、調理が不十分なときには腹痛や嘔吐を惹き起こし死に至ることもある。

○民本主義

「民本主義」は「立憲」「憲政」などの語と共に democracy を考察した新造語として用いられている。この語は各人各様に用いられ、はっきりとした定義がなかった。

8.2 吉野作造の民本主義

吉野は『中央公論』に百頁を超える論文を発表した。成熟した国民の存在を前提とした上で、「立憲政治」という憲法を以ってする政治について論じ、その立憲政治の根本に民本主義を置く。吉野は民本主義を「一般民衆の利益幸福ならびにその意向に重きを置くという政権運用上の方針」と定義した。

吉野は民本主義を democracy の訳語とする。もう一つの訳語「民主主義」は「国家の主権は人民に在り」というもので、君主国日本には相応しくないとして斥ける。吉野は民本主義を主権の存在ではなく、主権の運用の概念とした上で、政治の目的を「一般人民の幸福」に置き、政策の決定は「一般人民の意向」によるものとした。

「主権」が天皇にあることを前提とし、「人民のための」政治、「人民の意向」を重視する政治として、民本主義が提唱された。民本主義とは、「国民」を基点として、立憲君主制下、大日本帝国憲法の運用によって政治及び社会の改良を図る議論であった。

1916(T5)年 1 月号、本資料 p.34 以下参照

立憲君主制下の主権の運用の概念

8.3 民本主義への批判

民本主義の歴史的な評価が揺らぐのは、内政的には自由主義を主張しているが、それが国家主義と結びつき、対外的には植民地領有や膨張主義などを容認し、帝国主義とのきっぱりとした態度がとりにくいためである。いわば民本主義は一国デモクラシーであった。日露戦争後、台湾や南樺太の植民地化がなされ、韓国併合がなされた。

山川によれば、デモクラシーとは階級闘争を伴うものであった。民主主義の到達を当然視する立場からすれば、吉野の主張は資本家階級のための「ブルジョア民主主義」だと断罪された…国家主義者からの批判に対しては…応える一方で、山川や大杉の批判に対しては、直接応答していない。…吉野自身は、おしる社会主義や無政府主義にある種の親近感を抱いていた。そして吉野なりの方法で理解し近づこうと試みていたのである。

田澤『前掲書』p.120-121。大杉栄「盲の手引きをする盲—吉野作造の民主主義墮落論」『文明批評』1918(T7)年 2 月、山川均『社会主義の立場から—デモクラシーの煩悶』三徳社 1919(T8)年 6 月

8.4 大正デモクラシーの限界

日露戦争後の都市民衆騒擾をきっかけに民本主義の潮流として台頭した大正デモクラシーは第一次世界大戦とロシア革命、米騒動により加速し「改造」の動きを生み出した。

雑業層や旦那衆、労働者・農民、或いは女性、被差別部落や植民地の人々がそれぞれの立場からアイデンティティを掲げ、社会変革を訴えた。

こうした動きにより 1925(T14)年、大正デモクラシーの二大政治目標で成立していた議院内閣制と残りの一つだった普通選挙が実現したが、抱き合わせに「治安維持法」が姿をあらわし、普通選挙法と治安維持法によるいわゆる「1925 年体制」が創出される。

1931(S6)年 9 月、広東軍が引き起こした柳条湖事件に端を発する満州事変は、大正デモクラシーの転換を促した。吉野作造は新聞論調が「一律に出兵謳歌」に傾いていることを批判している。満州事変は、日本社会の対立を先鋭化させる傍ら、対立と対抗の存在を解消し、消去してしまう論調を作り上げた。大正デモクラシーの限界であった。

成田龍一『大正デモクラシー — シリーズ 日本近現代史 4』岩波新書 2007 年 p.237

治安維持法
普通選挙法

柳条湖事件
満州事変

8.5 鈴木安蔵を通じて戦後の日本国憲法へ



鈴木安蔵『憲法学三十年』評論社より

吉野作造の唱えたデモクラシーの政治思想そのものは、その弟子、鈴木安蔵が執筆した「憲法研究会」案を通して、戦後の日本国憲法へと受け継がれていった。

京都大学で河上肇の教えを受けた鈴木安蔵が、1933(S8)年 1 月 8 日と 3 月 5 日の二回にわたって、吉野作造を訪問し、憲法研究の教えを請うた。鈴木は栗原基の長女俊子の夫であり、栗原の紹介である。鈴木は治安維持法違反で二度の投獄を経験していた。

鈴木は吉野の影響を受け、吉野の示唆に従って憲法研究を進め、「憲法研究会」を主宰した。敗戦後 GHQ は、新憲法制定の際、鈴木が起草した「憲法研究会」案が最も自由主義的であると評価し、草案は新憲法制定の基礎になった。この意味で吉野のデモクラシーの思想が新憲法にも大きな影響を与えたのである。

鈴木安蔵(1904-1983)
憲法研究会

吉野作造への献辞

鈴木安蔵が以下のように、1933(S8)年 6 月に公にした「憲法の歴史的研究」で吉野に対する献辞を述べている。

研究を大成させることによって…先生の理論的遺産を継承し発展せしめることを念願する。

1933.3.18 鈴木安蔵